

## 56 足立文太郎のひとと業績について

○本宮かをる・オルリー・レジス<sup>1)</sup>  
 ○本宮かをる・オルリー・レジス<sup>2)</sup>

昭和三(一九二八)年、解剖学者の足立文太郎(慶應元年—昭和二〇年)は、日本人の動脈系の研究を大著“Das Arteriensystem der Japaner.”(京都帝国大学)にまとめ出版し、国内のみならず欧州諸国の大学医学部へ謹上した。続いて日本人の静脈系の研究を出版、死後、助手によってリンパ系の研究が出版された結果、足立文太郎は脈管系の分野において広く知られ、現代もなお引用される存在となった。本稿は国内よりもむしろ欧米の研究者に高名ともいえる人類解剖学者“Adachi”の経歴を辿り、ご息女である井上ふみ氏(故井上靖夫人)からうかがった人物像をまじえながら、その業績について報告する。

足立文太郎は慶應元年、静岡県に生まれ、明治二十七年東京帝国大学医学部を卒業した。翌年、第三高等中学(岡

山県)へ赴任、明治三二年ドイツのストラスブルク大学(現フランスのストラスブール)で解剖人類学者G・シュワルヴェに学ぶ。足立は経費を節約して留学期間をのびし、欧州各地の大学に出向いた。そのため明治三十三年に京都帝国大学医科助教授に任ぜられたが、その四年後に帰国して教授に就任した。大正一〇年に京都帝国大学医科大学学長に任ぜられ、大正一四年に定年退官後、昭和二年から七年にかけて大阪高等医学専門学校初代校長に就任。昭和三年「日本人の体質の研究」(岡書房)と前出“Das Arteriensystem der Japaner.”(京都帝国大学)を出版、後者で帝国学士院恩賜賞受賞。昭和一五年“Das Venensystem der Japaner.”(同)出版。その間、日本人の胸部リンパ管系:Der Ductus thoracicus der Japaner.の研究をまとめたが出版を待たず昭和二〇年、脳溢血で没している。この研究は助手・木原卓三郎に継がれて、深部リンパ管系の部“Tiefe Lymphgefäß der Japaner.”が完成し、一九五三年に出版された。

足立の研究は、解剖学、特に日本人の血管解剖学に集約される。実際に前出の脈管系三部作は、現在古書店で

見ても目を引く大著である。「Das Arteriensystem der Japaner」は約三九c m × 二八c mの赤いハードカバーで、ドイツ語で書かれ、第一報告から三〇年を経た労作である。解剖所見のデータ量で圧倒し、当時寄贈を受けた者も賛を惜しまず、ポーランドの人類学者 Edward Loth には「光は再び東洋より」といわしめた。立派な本を見て「日本には Adachi という富豪がいる」といわれたが、実際の足立は清貧の人であった。「日本人の体質の研究」に清野博士が寄せた文章に以下のような描写がある。

「十年一日の如く着古された古洋服と古帽子に下駄履きで肩から小学校生徒の使用するズック製カバンを下げて、大学へ来られる姿は大学教授でなくて、正に小使であった。」

また足立は、人類学に心を潜め軟部人類学を唱導した。論文集「日本人の体質の研究」は、岡山時代の研究材料による論文が多くを占める。しかしその後、研究対象は骨部に移行し、留学時代は各民族の骨格標本を計測してデータを収集していた。人種解剖学は、一九一二年ロートが「今までの解剖学は欧州人のもので、全人類のもの

ではなかった」と書いたように、当時必要とされた学問であった。足立は蒙古斑や体臭も調査し、当時原始的な進化的とされた身体的特徴において人種間の優劣はないという結論を導いた。

自らを「老いたる研究生」とよび退官後も研究を続けた足立は、脳溢血で死に倒れた時も自宅で机に向かっていたという。終戦の年四月一日であった。京都法然院に墓所がある。また少年時代を過ごした湯河原小学校に「懸命不動」とかかれた碑が、校長を務めた大阪医専（現大阪医科大学）に胸像がある。

(1) Aloalo International Institute

(2) Université du Québec a Trois-Rivières